

「数」の背後にある意味

——「なぞなぞ」と「ことわざ」から考える数詞の日英比較——

清海節子

1. はじめに

本稿では、なぞなぞとことわざに見られる「数」¹⁾の意味について日英比較研究を試みる。民間伝承からのデータであるなぞなぞと、ことわざに使用されている数を詳細に検討しその役割を考察する。日本語と英語からのデータを扱い、どの「数」が高い頻度で用いられているか、また、どのような用法が見られるかを観察し、数量以外の意味の可能性を探る。即ち、「数」は単なる数量詞として捉えるべきではなく、質的な意味を表す属性形容詞としての役割も果たすという仮説の裏付けをとることが目標である。

清海(2013)は、日本の「二段なぞ」と、英語(主にイギリス)のなぞを比較研究し、反義語・反復表現が用いられているなぞを除く58の二段なぞと45の英語のなぞを比較し考察した。そのデータでは、日本のなぞで一番多く見つかった数が「1」であり、次に多かったのが、「2」、「3」、「1000」であった。また、英語のなぞには数があまり見つからなかったが、日本のなぞと同様に、一桁と四桁というような離れた数字が使われている例があった。しかしこの研究は、データ数が限られていた上、「1」と‘a’の関係性、また序数詞の‘first’の扱い方等を考慮に入れなかったため、十分に検討されたとは言えない。本論では、英語での単数の扱い方についての基準を整え、なぞなぞのデータ数を増やし、より正確な考察ができるようにする。データとして『世界なぞなぞ大辞典』(1984)の「日本本土のなぞなぞ(二段なぞ)」(158例)と「イギリスのなぞなぞ」(131例)という項で紹介されているすべてのなぞなぞ、総数289例を対象に、数詞に焦点を当て、その頻度や用法を通して数量以外の意味の可能性を考察する。同時に、日英のことわざで用いられる「数」も考慮に入れ、日英の類似点と相違点について検討する。

本稿の構成は次の通りである。2節では、「数」の捉え方について説明し、名前に使われる数字について簡潔に説明する。3節では、日英での数の表現や捉え方の違いについて考える。最初に、日本語の数詞の用例には、ほとんどの場合に付随する助数詞を取り上げ、その性質について考え、次に日本語と英語の単数の表現につい

て検討する。4節では、日本の二段などに於ける数詞の考察、5節では英語のなぞに於ける数詞の検討をする。6節で、日英のなぞに於ける数詞の比較を行い、類似点と相違点を明らかにする。7節では、奥津(2000)を参考に、基本的なことわざに見られる数詞にかんして日英間の共通点と相違点を論じる。最後の8節では、結論が述べられる。

2. 数の捉え方

この節では、最初に、松本(2006)を参照し、数詞と数字の違いを確認した後で、名前に使われている数字についての概略を提示する。言語で使われる「数」の定義は、松本によると、「数字」と「数詞」とに分けられ、それらの違いにかんして以下のような説明がされている。

「数詞」は、人がものを数えたり計算したりするときに使う「数」が日常言語で形式化されたものである。数詞は通常、語彙体系の中で固有の位置を占め、文法的にも他の品詞と違った独自の振舞いをすることが多い。一方、アラビア数字のように、数を直接符号化したものは、数詞ではなくて「数字」である。もちろん両者の間には、言語によってそれぞれ一定の対応関係がある。たとえば、7という数字は、日本語では場合によって「ナナ」とも読まれ「シチ」とも読まれる。前者は日本語の固有数詞、後者は中国語からの借用した漢数詞である。(松本 2006:303)

松本は、数を直接符号化したものをアラビア数字と述べているが、日本語であれば、アラビア数字だけでなく、漢数字も含められる。本論に関連して、松本の分類を換言してみよう。言語の中で、数字が計算などのために日常的に使用されると「数詞」と呼ばれ、なぞなぞや、ことわざにも用いられている。それに対して、符号化して使用されると「数字」と考える。例えば、名前に使われる数は、「数字」と捉えて良いだろう。名前は、数の音や意味を基に使用されるのであって、数えることが目的でないからである。

日本語の名前にしばしば使用されている数字について少し言及する。以前、男性の名に「正一」「昭二」などのように最後に数字がつく名はかなり多くみられた。寿岳(1979: 185-86)は、その割合を調査し、明治末期から大正初期生まれでは26%、昭和初期生まれでは19%、昭和35年前後生まれでは9%と、減少していると述べて

いる。しかし現在でも数字が使われていることに変わりはない。明治安田生命²⁾が1912年から調査している『生まれ年別ベスト10』をみると、男子の名前には、「正一」「一郎」「正二」「三郎」など、また、女子の名には、「千代(子)」「八重子」「七海」がベスト10入りしている。最近では、2013年『名前ベスト100』によると、男子の名で数字がみられるものは、「太一」と「颯一」だけで、「一」以外の数字は見つからなかった。一方、女子は、「一華」,「一花」,「七海」が見られ、ランキング100位までの名付けにも複数の数字が用いられている。

このように漢数字が名前に用いられる理由の1つに、漢数字の読み方が関係している。名前に於ける数の読み方が複数種あることは興味深い日本語の特徴だと思われる。例えば、漢字の「一」は、名前としては、「イチ」,「イツ」,「ヒト」,「カズ」,「ハジメ」等の読み方がある。同様に、漢字の「三」も「ゾウ」,「サブ」,「ミ」等と読み方は複数ある。しかし、それとは対照的に、漢字の「二」が名前として用いられる場合、主に「ジ」としてだけ読まれる。女子の名前で使われる「百」は、主に「モモ」, また「千」は「チ」と読まれ、「ヒャク」や、「セン」とはあまり読まれない。

また、最近では、音楽グループ名にも数字が用いられている。「AKB48」等、アルファベットと数字を組み合わせたグループ名で、さらに、読み方が英語で「フォーティエイト」であり、「ヨンジュウハチ」ではない。1970年代には、兄弟5人グループの「フィンガー5 (ファイブ)」もいた。このように、人名以外の名に使われる数字にかんして、日本語だけではなく発音も受け入れられている。

英語ではどうであろうか。一般的に人名に数が入ることはないが、バンド名に見つけることができる。Wilson (2004)は、20世紀のポピュラー音楽で活躍したバンド名を分類しているが、その中には、数字が入った名前の数は多数ではないが存在するのである。Wilson のデータを調査すると、数字(アラビア数字と英語での表記)で始まる名前は次のような17例であった。

- (1) '10C. C.' '10,000 Maniacs' '1910Fruitgum Co.' '2pac' '2-Tone'
'311' '4 Non-Blondes' 'Five For Fighting' 'Four Seasons'
'Four Tops' '49ers' '5th Dimension' '808 State' 'Nine Inch Nails'
'98 Degrees' '999' 'Three Dog Night'

上の例から、アラビア文字と英語の二種類の表記は違っても数だけのバンド名は2

例(‘311’, ‘999’)だけであり、数の後に英語が続く例が多い。次は、数字がアルファベットの後で使われているバンド名であり、17例が見つかった。

- (2) ‘A3’ ‘Apollo 440’ ‘Area Code 615’ ‘B-52s’ ‘Blink 182’ ‘East 17’
 ‘L7’ ‘Eve 6’ ‘Gang Of Four’ ‘Grandmaster Flash & the Furious Five’
 ‘Heaven17’ ‘Level 42’ ‘Matchbox 20’ ‘U2’ ‘UB40’
 ‘Unit Four Plus Two’ ‘Vanity 6’

Wilson(2004)のデータから観察されるのは、数から始まる名と、数で終わる名が同数であったこと、また、数字だけで成立しているバンド名が34例中2例しかなかったことである。従って、英語のロックバンド名は、数が含まれると、その前後に英語が使われる傾向があると言えよう。この傾向は、日本語の名に「一二三」と数字だけの名前もあるが、ほとんどの場合に「一郎」「八重」等のように数以外の文字が付随するので、日本語にも当てはまる傾向であると言える。

以上のように、数は、日英両言語ともに「数字」として、普通名詞でなく、固有名詞にしばしば使われている。その場合に「数」のシンボリックな面も表出されるはずで、数詞も単にモノを数える数量詞としてのみ用いられているのではないと推測して良いであろう。

3. 日本語と英語での「数」の表現についての違い

日英語間で「数」の捉え方に関しては、助数詞と単数の扱いが異なっている。日本語では、多くの場合に、数詞としての数には、数えるものの範疇を示す要素である助数詞(類別詞)が付随する点が特徴である。以下、助数詞に関する先行研究を紹介し、その後、単数の表現について英語と日本語の違いを検討していく。

3.1 日本語の数詞と助数詞

日本語では、個数や順序を数え上げる時だけは、「いち、にい、さん」とそのままの形で用いるのだが、数が数詞として用いられると、助数詞が必要になることが多い。清水(1999)によると、日本語の数詞には、和語と漢語という二系統があり、数える対象の名詞によって複雑な分布を示している。1~10 までは、主に日本語固有数詞と漢数詞が並立しており、11からは、漢数詞だけが使われる。例えば、個数を数える時は、和漢が並び、和語で「一つ」は、9までに付くが、10は「とお」にな

る。漢語系の助数詞の「-個」は、4 と 7が、「よん個」「なな個」と和語になるが、共起する数詞に制限がなく、生産的に使用される。一方「つ」には、制限があり、1~9までの和語自然数にだけ共起でき、「ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いっつ、むっつ、ななつ、やっつ、ここのつ」まで用いられるが、10以上は無理で、「*じゅっつ(十つ)」や、「*じゅうひとつ(十一つ)」、「*じゅうふたつ(十二つ)」は一般的に使われない。

天岩(1999)によると、子供が数概念を獲得することはそれほど容易ではないが、数の量を比較することや、数詞を言うこと、また数を数えることは、かなり早い時期に獲得している。まだ一歳以前の乳児でも数の違いが分かるということが研究で確かめられていると述べている。天岩(1997)では、幼稚園児(3歳~5歳)を対象に、自由遊びの中で、数が用いられた場面を取り出し分析を行った。その結果、合計602の数表現は以下のように18種類に分類された(カッコ内は天岩の例から取った)。

- (3) (i) カウント(順にカウントする:「1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10」と数える)
- (ii) 個数(物の個数・枚数・本数等:「石けん3個もらってくる。」)
- (iii) 回数:(「自分で10回数えたら。」)
- (iv) 再度(繰り返しの意味で使う:例「もう一回これつくる。」)
- (v) 人数(人の数を表す:「6人乗っかってー。」)
- (vi) まとまり(ひとまとまりを示す:「2人づつ入って下さい。」)
- (vii) 特定化(特定の物や人を示す:「あの2人が犯人だ。」)
- (viii) 重なり:縦の重なりを表す:「すべり台3段にしたい。」)
- (ix) 年齢(年齢を示す:「Sちゃん(自分のこと)今6歳。」)
- (x) 時間(時刻や時間をあらわす:「まだ12時になっていないんだけど。」)
- (xi) 月日(月や日付をあらわす:「4月6日だ。」)
- (xii) 長さ(主にメートルをつけて一定の長さをあらわす:「70mもあるの。」)
- (xiii) 温度(気温や温度をあらわす:「32度で暑いんだよな。」)
- (xiv) 順位(順位をあらわす「おれ1番だよ。」)
- (xv) 金額(金額をあらわす:「600円になります。」)
- (xvi) 読む(数を読み上げる:「6だ。」)
- (xvii) 書く(数を書く:紙に数字を書く)
- (xviii) 計算(たし算をおこなう:「3たす3は6個。」)

以上の分類の中で、もっとも多い出現率が観察されたのが、「個数」で、23.8%であり、「個・枚・本・匹・つ」等助数詞を伴って現れる表現である。つまり、遊びの中で、幼児は物の数を表すために数を言うことが多いのである。その次に現れる率が多いのが、8.0~11.0%とほぼ同程度である「カウント」「再度」「順位」「回数」「人数」「まとめり」の6つであることが分かった。また、助数詞を伴わない例を除く491の反応では、86.2%が正しい助数詞で、曖昧なものが13.0%、誤りが0.8%であった。このことから、遊びの中で、幼児が用いる助数詞は、ほぼ正確で、誤っている場合が稀であると報告されている。

また、今井・針生(2007:124-6)は、子供は、一般性の高い助数詞(「個」「つ」)を2歳半には産出し始めるが、助数詞の種類はすぐには増えないと述べている。子供にモノを提示して教えることを求める研究から、4歳の子どもが、「つ」「個」「人」の3種類の助数詞だけ使い、5歳の時点で「匹」を使い始めることが分かった。しかし、形状を基準とした特徴助種類数詞(「本」「枚」「粒」など)や、機能を基準とした種類助数詞(「台」)は、複雑な分類基準によって成立しているために獲得ペースが遅れ、5歳では、まだ正しく使いこなせないと述べている。

3.2 単数の捉え方についての日英比較

英語では、名詞には、冠詞が必要で、一つのものや人を指す場合には、英語なら不定冠詞‘a’、または、‘one’である。Quirk et al. (1985:273-274)によると、不定冠詞は、アクセントがない‘one’から派生した形であり、現在の英語でも、‘a’は多くの文脈で、数として機能する。従って、次の等位構文では、‘a’を‘one’に置き換えると少し強調した表現となる。

(4) ‘a mile or two’ → ‘one or two miles’

また、次の例では、‘one’が、‘a’と入れ替わることができるが、形容詞の‘single’を加えて不定冠詞を強調することができる。

(5) ‘Mungo can walk forty miles in a (single) day.’

上の例から、‘one’は‘a single’と同等の役割を果たすと理解できる。日本語では、不定冠詞はないので、‘a’に相当する日本語はないが、一つだけあることを強調す

る場合だけ、「1」に助数詞を付加して用いるので、英語の‘one’と‘a(single)’の2通りに相当すると考える。

Oxford Dictionary of English (2010)では、以下に要約するように、冠詞の‘a’(‘an’)を3種類に分けている。

(6) (i) 文章や会話で初めて述べる人やモノ。

例) ‘A man came out of the room.’

- ・一つの単位を表す。例) ‘a hundred’
- ・(否定を伴って)全く、ひとつも。例) ‘I simply haven’t a thing to wear.’
- ・相手が知らない人の名前を述べる時。例) ‘A Mr. Smith telephoned.’
- ・…のような人 例) ‘You’re no better than a Hitler.’

(ii) 人やモノの部類に属することを示す。

例) ‘He is a lawyer.’ ‘This car is a BMW.’

(iii) …に於いて／対して、…につき

例) ‘Typing 60 words a minute.’ ‘A move to raise petrol prices by 3p a litre.’

上の分類からでは、‘a’が‘one’の意味で使用されているかどうか明確でない。一方、『ジーニアス英和大辞典』(2001-2008)では、‘a’(‘an’)をまずその組み合わせからローマ数字(I-IV)で4分割し、全体を17分類している。以下は、各項目の意味の要約と例文である。

(7)

I [a(n) + 単数名詞]

(i) 初めて登場するある特定の人やモノ(日本語では訳さないことが多い)

例) ‘A boy came running toward me. He was breathless.’

(ii) 総称的にどの、どれも、…というものはすべて(否定文で)ただひとつも

例) ‘A horse is a domestic animal.’

(iii) 1つの、1人[1匹など]の(‘one’の弱い意味)

例) ‘a kilogram of rice’ ‘a friend of mine’ ‘for a week.’

‘Not a star was visible.’

(iv) [a(n) + 主格・目的格補語名詞]<<日本語には訳さない>>

例) 'He is a bus driver.'

- (v) それぞれの, [a(n)+数量・期間を表す名詞]…につき (each),
…ごとに (every)

例) 'We have a nose.' 'It costs eight pounds an ounce.'

II [a(n)+U]名詞]

- (vi) [a(n) + 物質名詞] 一種の, 一杯の

例) 'a good [French] wine' 'Give me a coffee.'

- (vii) [a(n) + 抽象名詞] 一例の, 1つの場合の, 一種の, ある量(期間)の

例) 'These slums are a disgrace to the city.'

III [a(n) + 固有名詞]

- (viii) (話し手の知らない) …という(名の)人

例) 'A Mr. Brown came to see you while you were out.'

- (ix) …のように偉大な(悪名高い)人(モノ)

例) 'The scientist thinks that he is an Einstein.'

- (x) …家の一員, …の製品, …の作品

例) 'She was a Smith before her marriage.' 'a real Picasso'

- (xi) [a(n) + 形容詞+ 固有名詞] (正確や一時的状態を示して) …な

例) 'I found an angry Tom there.'

IV [その他]

- (xii) [a(n) + 数量詞] [a(n) + 曜日・月名] ある(特定の) …

例) 'a dozen' 'a Sunday'

- (xiii) [a(n) + 序数詞] もう1つの (another)

例) 'She tried to jump up a second time.'

- (xiv) [a(n) + 数詞 + 複数名詞] 1つの,

[a(n)+(estimated)+数詞+複数名詞] およそ

例) 'It's been a difficult nine years.'

'An estimated five hundred people have since applied for the job.'

- (xv) [have (take 等)+a(n) + 動詞派生名詞] …する

例) 'have a careful look at the picture.'

(xvi) 同じ, 同一の (the same)

例) ‘We are of an age.’

(xvii) かなり長い間の: かなりよい

例) ‘wait a while’ ‘That’s a thought.’

以上のように詳細に分類された17の意味の中で, (iii) は, ‘one’ の弱い意味として, 「1つの, 1つの」を表すことが分かる(例: ‘for a week’ ; ‘Here is a pen.’ 等)。また, (vi), (vii), (x), (xiv) も, 「1つ」と同等の意味を示すと思われる。それに対して(v)「それぞれ」(xii)「ある」(xvi)「同一の」などは「1つ」の意味から離れている。このように, ‘a(an)’ と ‘one’ の関係は, 単純ではない。しかし本論では, 他の数詞と対比して用いられる時や, 明らかに数量を表している場合に, ‘a(an)’ が ‘one’ (「1」) と同等の意味で用いられているとみなす。

今回, データとして使う英語のなぞなぞは, 『世界なぞなぞ大辞典』(1984)の「イギリスのなぞなぞ」という項で紹介されている英語のなぞ³⁾で総数は131である。その中で, 英語の ‘a’ がどのように日本語に訳されているか調べてみよう。日本語に訳す時には, 「一つ」や, 「1…」と表されることは多くない。例えば, 次の例(関連する部分には, 下線を施した)の ‘a house’ は単に「館」として訳され, 「一件の館」と表現されていない。

(8) On the hill there’s a green house, 丘の上に緑の館

In that green house there’s a white house, その中には白い館

In that white house there’s a red house, その中には赤い館

In that red house there are lot of little black and white men.

その中には白いと黒の小人が大勢住んでいる。

(答え: スイカ ‘watermelon’)

しかし, 稀にはあるが, 次の例(関連する部分には下線を施した)のように, すべての ‘a’ を「1」と訳している例も見つかる。以下の例で重要な点は, ‘a’ に対応する訳が, 5種類の助数詞「-軒」「-竿」「-つ」「-個」「-滴」に変化していることである。即ち, ‘a’ が5種類の形態素となり, オリジナルの英語にはない表現を生み出している。従って, 日本語訳では, 英語の不定冠詞の部分が意味的にも音的にもより重要な役割を果たしている。

- | | |
|--|--|
| <p>(9) Down under the hill there was <u>a mill</u>,
 In the mill there was <u>a chest</u>,
 and in the chest there was <u>a till</u>,
 In the till there was <u>a cup</u>,
 And in the cup there was <u>a drop</u>.
 No man could drink it,
 No man could eat it,
 No man could do without it.</p> | <p>丘の麓に水車小屋1軒,
 水車小屋に大きな箱1筭,
 大きな箱に引き出し1つ,
 引き出しコップ1個,
 コップにしずく1滴,
 飲めもしないしずくだが,
 食えもしないしずくだが,
 これなしには生きられない。
 (答え：血液 ‘the heart’s blood’)</p> |
|--|--|

上の例で(8)の「館」は緑、白、赤と色で修飾され、大きさもある程度あると予想できるので、「1」を用いて訳さなくとも、一軒であるだろうと解釈しやすい。それに対して、(9)の「水車小屋」の大きさは、「館」よりは小さいはずであるし、その後「箱、引き出し、コップ、しずく」が続くことから、すべてのモノに関して、「1」を用いて訳した方が分かりやすいと考えられる。しかしながら、今回のデータについて言うと、(9)の例のように、「a」を「1」として訳してあるものは、この例だけであり、全般的に日本語では、単数について言及しない傾向にあることが分かる。従って、「a」は「1」と訳さない傾向があると言えるだろう。一方で、以下で紹介する日本語のなぞなぞには、「1」に関連する語(例：「一つ」「一本」)が多いことが示される。つまり、日本のなぞなぞでしばしば「1」が使用されていること自体が注目されるべきで、数詞の中で特に「1」が頻繁に用いられていることは、なぞなぞの特徴であると考えられるべきである。

3.3 俳句の翻訳における数の表現

3.2では、英語の‘a’は、日本語に翻訳される時、数詞で表されることが一般的でないことが分かった。それでは、日本語を英語に訳す時には、数詞に関して、どのような問題が生じるであろうか。例えば、芭蕉の有名な俳句の1つ「古池や蛙飛び込む水の音」を英訳すると、可能性として、カエルを1匹(‘a frog’)とするか、2匹以上(‘frogs’)にするかの2通りの可能性がある。実際に翻訳された俳句の例を検討してみよう。難波(1985: 96-98)は、以下のように、7人の訳者による、芭蕉の「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」の異なる英語訳を挙げている(下線部分{直線 = 「蟬」; 波線 = 「声」}は筆者が施した)。

- (10) (i) Such stillness—
The cries of the cicadas
Sink into the rocks.
(Donald Keene (ed.), 1956, *Anthology of Japanese Literature* :371, Tuttle)
- (ii) How still it is!
Stinging into the stones,
The locusts' trill. (Donald Keene, 1976, *World Within Walls* :89, Tuttle)
- (iii) In this hush profound,
Into the very rocks it seeps—
The cicada sound.
(Dorothy Britton (tr.) 1974, *A Haiku Journey* : 62, Kodansha International)
- (iv) The Silence;
The voice of the cicadas
Penetrates the rocks. (Blyth, R.H. 1952, *Haiku* 3: 816, Hokuseido)
- (v) Stillness
Penetrating the rocks.
The sounds of cicada. (Don Sanderson (tr.), 1983, *A History of Japanese Literature* 2:101, Kodansha International)
- (vi) Quietness—
Sinking into the rocks,
A cicada's cry.
(Makoto Ueda, 1982, *Matsuo Basho* : 52, Kodansha International)
- (vii) How silent and still!
Into the heart of rocks sinks
The cicada's shrill.

(Kenneth Yasuda, 1857, *The Japanese Haiku*: 185, Tuttle)

上の7種類の英訳では、下線部を施した「蟬」が‘locust’と‘cicada’の2語に訳され、3つの訳では単数形、残りの4つの訳では、複数形が使われている。また、波線の部分の「声」の訳は、単数形で表されている方が5例と多く、それぞれ違った語(‘trill’, ‘sound’, ‘voice’, ‘cry’, ‘shrill’)が用いられている。また、複数形は、‘cries’と‘sounds’の2通りに訳されている。つまり、「蟬」が何匹であるか、「蟬の声」が幾度聞こえるかは、共通した一定の解釈があるというわけではなく、各訳者によって印象が異なることを示している。

本論では、基本的に、‘one’で表現されている例を「1」とみなし、‘a (an)’は「1」とはみなさないことにする。しかし、(7)のI(iii)のように、‘one’の弱い意味として、「1つの、1人の」を表す時や、他の数詞と対比されて‘a’が用いられている等「1」との関連性が強調されていると認められる場合に限り、‘a (an)’も「1」として取り扱うことにする。また、序数詞も考慮に入れた。

4. 二段などで用いられる数詞と頻度

この節では、日本のなぞに於ける数詞を検討する。データは、『世界なぞなぞ大辞典』(1984)の「日本本土のなぞなぞ」という項の中の二段なぞである。これらは日本の伝統的な子供向けの二段なぞである。三段なぞは除き、サンプルデータの総数は158で、数が含まれるすべてのなぞなぞを対象に考慮した。⁴⁾ 調査した結果、158例中45例に数詞が含まれることが分かった。一つのなぞなぞに、2つの数詞が用いられている場合もある。以下では、数詞が一種類だけ入ったものを最初に扱い、次に2種類の数詞が用いられているもの、その後、3種類以上含まれる例の順で見ていくことにする。

使用例の数え方に関しては、一つのなぞに一種類の数詞が複数回使われていても、一回として数えた。また、一つのなぞに複数種の数詞が使用されている場合は、それぞれの数詞を一回ずつカウントした。データを調査した結果、使用されている数は、10種類で、一桁では、「7」と「9」が見つからなかった。二桁は「12」のみで、3桁は「100」、4桁は「1000」だけが用いられていた。以下に、それぞれの数詞が、45のなぞなぞで何例使われているか示した。

表1 45の日本の二段なぞにみられる数詞と使用例数

数詞	‘1’	‘2’	‘3’	‘4’	‘5’	‘6’	‘8’	‘12’	‘100’	‘1000’
例数(63)	23	11	10	6	1	2	1	2	2	5

上の結果から分かるのは、例数の合計が63であるが、一桁の数では、「1」「2」「3」という3種類の数詞の使用例が多い。「1」の数が一番多く、2, 3番目に多い、「2」と「3」が使用された例の倍以上用いられていることが分かる。二桁では「12」（時計を表す）だけが見つかったこと、また、三桁と四桁では後者の使用例が多かったことは興味深い。以下では、数詞が1種類、2種類、3種類用いられている例を順番に見ていくことにする。

4.1 1種類の数詞が用いられている例（29例）

1種類の数詞が用いられている総数は29である。「1」だけ反復が見つかった。以下、数が低い順に例を検討する。

(11) 「1」（11例）

- ・青い座敷に金の盃1つ。(太陽(あるいは月))
- ・だんだん畑に穴1つ。(湯たんぼ)
- ・骨と皮ばかりで手足が1本もないもの。(傘)
- ・山は回る, 雪は降る, がけっぱたに釘1本。(石うす)
- ・1本道に草ぼうぼう。(歯ブラシ)
- ・夏に出てくる冷たい1本足のお化け。(アイスキャンデー)
- ・家中で1番のひびきらし。(壁)
- ・きれいな座敷に板1枚足りないもの。(便所)
- ・世界で1番赤い星。(梅干し)

(「1」が繰り返されている例)

- ・1つ目小僧で足1本。(針)
- ・1週間に1度赤い着物を着るもの。(日めくり)

単独の数の用例として、「1」が最も多いことは注目すべきである。また、頻度順の

助数詞は「一本」(5), 「一つ」(3), 「一番」(2), 「一枚」(1), 「一度」(1), 「一週間」(1)である。留意すべきことは, 「一本」「一番」「一枚」の「1」の発音は, 総て異なり, /ippon/, /hitotsu/, /itiiban/ と下線を施した部分のように3種ある。また, 「1」が繰り返されている例では, 各例で2つの助数詞が異なっている点も見逃せない。

以下挙げる「2」以上の数詞の中で, 「2」が /hutari/, /hutatsu/, /nihon/, また「4」が /yotsugo/, /shihoo/ と下線の部分で表されているように, それぞれ異なる発音がある。その他の数詞(「3」「8」「100」「1000」)の読み方は種類だけである。

(12) 「2」(4例)

- ・親は2人で子のたくさんあるもの。(はしご)
- ・鉄の家に入り, 木の家に入り, 瀬戸物の家に入り, 二本橋を通って暗い道に行くもの。(ご飯)
- ・広い野原にによう2つ⁵⁾。(乳)
- ・頭もなく手もなく, 2本足で歩くもの。(竹馬)

(13) 「3」(4例)

- ・3里行つては帰つてくるもの。(糸より車)
- ・3人兄弟首まがり。(ごとく)
- ・黒山に坊主3人。(鍋の底)
- ・三角の殿様が石車に乗つて, 湯湯治とうじに行くもの。(蕎麦)

(14) 「4」(3例)

- ・四つ子の背中あぶり。(いろりぶち {炉ばたの4本の木})
- ・四方白壁, なかぴっかり (あるいは, なかちらちら)あんどん。(行燈)
- ・四方白壁, とんぼなし⁶⁾。(豆腐)

(15) 「8」(1例)

- ・8人で鉢巻をして, あの山を越え, この山を越えているもの。(俵あみ)

(16) 「100」(1例) 障子のかげに赤い小僧さん百人。(ザクロ)

(17) 「1000」(5例)

- ・千人坊主の縄ふっぱり⁷⁾。(数珠)
- ・千すじの松原にヒヨが鳴いて通るもの。(はた織り(あるいはむしろ織り))
- ・小人千人で綱曳きしているもの。(納豆)
- ・家のめぐりの槍千本。(つらら)
- ・箱の中に千人坊主。(マッチ)

以上の例の中で、「1」は「最も」の意味で「1番」として使われているものが2例あり、数詞で多いのは、「本」、「人」、「つ」であった。また、「三角」といった数で形を表す例が1つあった。

4.2 2種類の数詞が使われている例 (13例)

2種類の数詞が使われている例は全部で13例あった。二つの数は対比され、反義的用法がみられると理解できる。以下の例では、「1」と「2」が一緒に用いられている例が4例と一番多く、次に多いのは、「1」と「4」の組み合わせが2例であった。

(18) 「1-2」 1つ字を書くと赤くなり、2つ字をかくと白になるもの。

(ち [血と乳になる])

- 「1-2」 親さまひとりに笠2枚。(俵)
- 「1-2」 3本足の1つ目小僧。(写真機)
- 「1-12」 弟は1回り、兄さん12回り。(時計の針)
- 「2-1」 ふたり坊主に袈裟1つ。(火箸)
- 「3-1」 3本足の1つ目小僧。(写真機)
- 「3-2」 3つ目小僧に歯が2本。(下駄)
- 「3-6」 目が3つで、足が6本。(馬に乗った丹下左膳)
- 「4-1」 しまんしまんの田の中によしで造った家1つ。⁸⁾(八幡太郎義家)
- 「4-1」 四角畠に牡丹の花1つ。(いろり)
- 「6-1」 六角堂に小僧一人⁹⁾、お詣りがなきや戸が開かないもの。(ホオズキ)
- 「12-2」 12人のお客様にお酌取2人。(時計の針)
- 「100-1」 百軒長屋に釜1つ。(汽車)

上の13例中、10例に「1」が見られ、対比される数で、少ない方は「1」である傾向があることが分かる。つまり「1」が対比の軸としての働きを担っている。また、助数詞に焦点を当てると、上の各例で、2種類の助数詞が同じであるのは、「1-12」の「回り」と「12-2」の「人」である。しかし後者の12人と2人の読み方が /nin/ と /ri/ であり、発音が異なっている。発音の点から言うと、13例中1例だけに同じ助数詞があったことになり、極めて少ない割合であることが分かった。

4.3 3種類に数詞が用いられている例 (3例)

3種類の数詞が用いられている例は以下の3例だけが見つかった。特徴として、数が1~5までに限られ、近い数の組み合わせになっている。

- (19) 「1-2-3」 1里行って、2里行って、3里めの大火事。(キセル)
 「4-2-3」 朝4本足、昼は2本足、夜は3本足。(人の一生)
 「5-3-1」 5人の兄弟で3番目の兄弟が一番大きいもの。(指)

上のデータから言えることは、2種類の数詞の組み合わせとは性質が異なり、3種の数が対比されているというよりも、数の連続性を暗示させる働きがあると捉えた方が良さだろう。換言すると、2種類の数詞が用いられているなどは、反義性が認められる可能性が高く、3種類の場合には低いと考えられる。

4.4 日本の二段なぞに於ける「数」の役割

4.1-4.3で観察した結果から、日本の二段なぞで見られる数詞の中で「1」が一番多く使われていることは、日本のなぞの特徴であると言える。サンプルデータの約半数、つまり、45例中23例に「1」があった。一桁の数では、「1」の他に「2」「3」「4」がある程度の頻度で使用されている。また、二桁では「12」、三桁では「100」、四桁では、「1000」だけである。つまり、一桁は、数詞の種類が多いが、二、三、四桁は一種類だけであった。また、最も多い「1」の漢字の読み方が、/ipp-/、/hito-/、/itfi-/のように3種もあったことが特色として挙げられる。1種類の数詞が用いられているなどでは、29例の内「1」が11例で、5例の「1000」、各4例の「2」と「3」に比べて、頻度が高い。2種類の数詞が使われているなどでは、「1」-「2」と、「1」-「4」の組み合わせが2例ずつあった。最も数が離れている組み合わせは、「1」-

「100」であった。数詞の対立として反義性が認められる2種類の数詞が用いられたなぞでは、13例中10例に「1」が観察された。3種類の数詞が一緒に見られるなぞは、3例だけあり、数詞が1～5に限られていた。

ここで日本語の「1」の役割について簡潔に説明する。日本語では加算名詞が単数であることを英語のように文法的に示す必要はない。例えば、同じ情景を表現する場合に「1」を含む「青い座敷に金の盃1つ」を「1」を省略して、「青い座敷に金の盃」と言い換えることが可能である。『新版ことば遊び辞典』(1981)では、答えが「月」のなぞなぞには、以下のように、数詞を含むものと含まないものがある。

(20)	数詞を含まない	数詞を含む
	青い座敷に銀の盃。	葵の座敷に盃 <u>一</u> つ。
	あおいの座敷に金の盃。	青空に貝 <u>一</u> 枚ナンダ。
	青い座敷に金の盃。	青空に皿 <u>一</u> 枚。
	広い座敷に銀の玉。	千畳の座敷に皿 <u>一</u> つ。

上の例で、子供が習得すべき基本的な助数詞の「枚」と「つ」だけが用いられている点は注目に値する。「千畳の座敷に皿一つ」は、[1-1000]という量での対比がされている。清海(2013)では、「1つ」の働きは単数であることを明言し、問いの情報をできるだけ正確にするだけでなく、名詞を‘salient’(卓立的)にする作用もあると提案した。また、「1」は、なぞなぞの口調を整えたり、助数詞を習得するための役目も担っていると考えた。さらに清海(2014)では、「1」が、質と量の両方を同時に表す可能性を提示した。つまり、「1」は数量と同時に、「良質の」や「適切な」といった肯定的な意味を表現する属性形容詞としての役割も果たしていると提案した。今回検討したのデータからも、「1」が頻繁に使用されていることが観察され、量を意味するだけでなく、属性形容詞としての働きがあることを裏付ける証拠であると考えられる。

5. 英語のなぞで用いられる数詞と頻度

この節では、英語のなぞを取り上げ、数詞がどのように用いられているか検討する。本論では、‘a’は、「1」とはみなさず、基本的に‘one’で表現されている場合が「1」に相当すると考える。しかしながら、(7iii)で示されるような‘one’の

弱い意味(例: ‘for a week’; ‘Here is a pen.’ 等)として、また、他の数詞と対比して ‘a (an)’ が用いられる場合(例: ‘A hundred eyes and never a nose.’ ‘Four fingers and a thumb’)では、明らかに ‘one’ と同等な意味として解釈されるので、「1」に相当するとした。また、‘one’ が総称的な不定代名詞として、「1」という数量に関連性を持たずに用いられる場合(例: ‘One must observe the rules.’ 「人は、規則を守らなければならない」)等は、考慮に入れていない。一方で、序数詞は考慮に入れた。¹⁰⁾ その理由は、英語では、「1番目」「2番目」の意味で、‘1st’, ‘2st’ と表記されると、‘first’, ‘second’ と読まれるからで、副詞的に使用される場合(‘first’ = 「初めて、初めは」)もカウントした。4.1でも述べたように、日本語には「1」の発音が複数あるが、英語でも同様に複数の発音があると考えられる。

データとして扱う131例中、数詞が用いられているものは34例であった。異なった数詞が複数用いられている例は15例である。一桁の数で、7, 8, 9の使用は見られなかった。また、二桁は4種類で、三桁と四桁は、1種類ずつである。以下に、見つけられた数詞が例数と共に示されている。日本語のデータと同様に、1種類の数詞が1つのなぞで繰り返されている時は、1例としてカウントしている。

表2 34の英語のなぞにみられる数詞と使用例数

数詞	‘1’	‘2’	‘3’	‘4’	‘5’	‘6’	‘10’	‘30’	‘39’	‘80’	‘100’	‘1000’
例数(53)	15	10	4	12	2	1	2	1	1	1	2	3

データ数が日本のなぞより27少ないこともあり、日本語の「1」に比べると、英語の「1」は、‘one’ と限定された ‘a’ をカウントしたが、例数は10少ない。特徴として見えてくるのは、「4」がかなり多いこと(12例)であり、それに次ぐ数が「2」(9例)ということである。

5.1 1種類の数詞が用いられている例 (19例)

1種類の数詞が用いられている総数は19である。その中で、「1」が5例で一番多く、次に「4」が4例、次に「2」と「1000」が2例で、他の数「3」「5」「6」「10」「39」「80」「100」は、すべて1例だった。以下、数が低い順に例を検討する。

(21) 「1」 (5例)

- House with one leg. 1本足の家。 (傘: 'umbrella')
- What goes all round the house and makes just one track.
家の近くを動き回り一筋のわだちを残すもの。
(1輪の手押し車 (ねこ車): 'wheelbarrow')
- It stands on its one leg with its heart in its head.
頭の中に心臓^{ハート}があって、1本足で立っているもの。(キャベツ: 'cabbage')
- What is that with one leg and one eye?
1本足の1つ目小僧ってなあに。 (針: 'needle')
- First you see me in the grass, ぼくは原っぱにいる,
Dressed in yellow gay; 初めは派手な黄色の衣装を付け,
Next I am in dainty white, 次にはきれいな白衣に替え,
Then I fly away. それから飛び去っていく。(たんぽぽ: 'dandelion')

(22) 「2」 (2例)

- Two brothers we are, ぼくらは双子,
Great burden we bear, 重い重い負担に耐え,
We're sorely oppressed, ひどく重荷に耐え,
Full all the day, 1日中ぎゅうづめで,
An' empty at night, 寝るときだけが,
When we go to rest. すっからかん。 (靴: 'pair of shoes')
- A dish full of all kinds of flowers, 深皿にいろいろな花が一杯,
You can't guess this riddle in two hours.
このなぞは2時間かけてもわかるまい。(ハチミツ: 'honey')

(23) 「3」 (1例)

As I was goin' up London Bridge, ロンドン橋を渡っていくと,
I met three living people, 3人の生身の人間に出会った。
They were neither men, women nor children.
彼らはそろって、男でもなく、女でもなく、子供でもない。
(1人の男と1人の女と1人の子: 'Was a man, a woman, and a child')

(24) 「4」 (3例)

- What has four eyes and cannot see?
目は4つあっても、ものが見えないのは。
(ミシシッピ : Mississippi) ['i' = 'eye' が4つある]
- Four legs up and four legs down, 上に4本足下に4本足,
Soft in the middle and hard all 'round. 中は柔らかく^{まわり}周囲は硬いもの。
(ベッド : 'bed')
- I'm in everyone's way, ぼくは通り道にいるけど,
Yet no one I stop: 通せんぼなんかしてないよ。
My four arms in every way play, 4つのお手手は自由自在,
And my head is nailed on at the top. 頭のとっぺん釘付けさ。
(回転式木戸 : 'turn-stile')

(25) 「5」 (1例)

It grows in the woods; 森の中で育ち,
It bellows in the towns. 街の中でうなる。
If you guess this riddle, このなぞ解けたら,
I'll give you five pounds. 5ポンドやるよ。(バイオリン : 'violin')

(26) 「6」 (1例)

How can you prove that a horse has six legs?
馬には足が6本あるということを、どうしたら証明できるかな。
(どんな馬でも前足は4本、後足は2本ある。: 'Every horse has
four legs (forelegs) in front and two behind.')¹¹⁾

(27) 「10」 (1例)

B10 ('Beaten' 「撃たれた」)

(28) 「39」 (1例)

Where did Washington go when he was 39 years old?
ワシントンは39才のとき、どこへ向かっていたのでしょうか。
(40才 : 'into his 40th year')

(29) 「80」 (1例)

I <u>80</u>	M on day
-------------	----------------

(‘I ate nothing on Monday.’ 「月曜日には、何も食べなかった。」)

(30) 「100」 (1例)

Long neck and no hands, 首ながで手は1本もなく,
Hundred legs and can't stand, 足は百本あるのに立てない,
Runs through the house of a morning, 朝の家を走り抜ける,
Stands behind the door when company comes.
仲間が来ると戸口の後で立っている。 (ほうき: ‘broom’)

(31) 「1000」 (2例)

- What has a thousand eyes but can't see?
目がたくさんあるのに、ものが見えないのは。 (指ぬき: ‘thimble’)
- A little thing has a thousand holes.
千もの穴のついた小さなもの。 (茶濾し: ‘strainer’)

上の (27) で、「10」は、‘beaten’ の下線部分の音を表し、(29) の「80」は「8」「0」に分けられ、それぞれ、‘ate’ と ‘nothing’ を表している。つまり、これら2例は、類似した音などを表現するために用いられているので、量を意味しない。また、「100」は1例、「1000」は2例しかないが、両数とも「多さ」を具体的な数値で表現していると考えられる。

5.2 2種類の数詞が使われている例 (9例)

2種類の数が使われている例は全部で9例あり、日本語と同様、対比され反義的用法として使われている。「1」と「2」, 「1」と「4」の組み合わせは以下のように各2組あった。

(32) 「1-2」 (1例)

A large theatre has two large windows upstairs,

大劇場の2階には、窓2つ。

two windows downstairs, 1階にも窓2つ。

a large door with white people, a red stage. What is that?

白人が並んだ大きな扉と赤い舞台が1つずつ。(ひとの顔: 'a person's head')

(33) 「2-1」 (1例)

Two people sat down 2人の人が丸太ん棒に
on a log to rest. 座って休んだ。

One was the father of the other 一方は他人の父親だが,
but the other was not his son. 他方は本人の息子ではない。

What kin were they? 一体この2人はどんな関係?

(父と娘: 'a father and a daughter')

(34) 「2-1000」 (1例)

What is this? 背骨2本に

Only two backbones, 千本のあばら骨

A thousand ribs. これなあに。 (鉄道線路: 'track')

(35) 「4-1」 (2例)

- What is it that has four legs and one back, 脚4本と背中もあって,
Yet can't walk? 歩けないのはなあに。 (いす: 'chair')
- Four fingers and a thumb, 指は5本¹²⁾ あるけれど,
Yet flesh and bone have I none. 骨も肉もない私。(グローブ: 'glove')

(36) 「4-2」 (1例)

A shoemaker makes shoes without leather, 皮革を使わず,

With all the four elements put together, 火, 水, 土と空気から,

Fire, Water, Earth, Air, 靴づくりする職人さん,

And every customer takes two pair. どの客も2足買っていく。

ぼてい
(馬蹄工 : 'horseshoer'¹³⁾)

(37) 「10-4」 (1例)

Him, hum under the bag, 袋の下で鼻歌を歌い,
Ten a-hauling four. 10人が4人を引っばっている。
(雌牛の乳しぼりをする男 : man milking a cow)

(38) 「30-1」 (1例)

Thirty white horses 真っ赤な丘に
Upon a red hill, 30頭の白い馬
Now they stamp, 足踏みしたり,
Now they champ, むしやむしやしたり,
Now they stand still. じっとそのまま立ち尽くしたり。(歯と歯茎 : 'teeth')

(39) 「100-1」 (1例)

A riddle, a riddle, as I suppose, なぞなぞなあになぞなあに,
A hundred eyes and never a nose. 目は百あっても鼻はなし。
(ふるい篩, またはジャガイモ : 'sifter, or potato')

全体9例の内「1」が6例に見られ最も多かったので、対比される数の少ない方が「1」であるのは、日本語と同様である。「2」が組み合わせの少ない方の数として用いられている例は、2例だけあった。つまり、対比される数で「1」が軸としての機能を果たす傾向がみられた。

5.3 3種類の数詞が用いられている例 (6例)

3種類の数詞が用いられているなぞは、以下の6例が見つかった。日本語のなぞと同様、3数の数が1~5までに限られている点が特徴的である。

(40) 「1-2-3」

What is that which is too much for one, ひとりではもてあまし
enough for two, ふたりで充分,

but nothing at all for three? 3人ではおじゃん。(秘密: 'secret')

「1-2-4」

One top, てっぺん1つ,

Two ends, 端2つ,

Four legs, 4本足で,

No bottom. 底なしさ。(食卓: 'table')

「1-3-4」

There was a thing three days old アダム(の顔)が80歳の時

When Adam was four score.¹⁴⁾ 生後3日のものがありました。

(三日月: 'crescent')

「1-4-5」

We are little airy creatures, 我等は, ちいさくはかないもの。

All of different voice and natures; みんな, 声も性質も違う。

One of us in glass is set; 1人はガラスの中,

One of us you will find in yet; 1人はイエットの中,

The other you may see in tin; 別の1人はかんの中,

And the fourth a box within; 4人目は箱のなか。

If the fifth you should pursue, 5人目を追いかけても,

It can never fly from you. お前さんの足元から, 飛び立つことはあ
りやしない。('A, E, I, O, U')

「4-2-1」

Four stiff-standes, 棒立ち男が4人,

Four dilly-danders, ぶらぶら者が4人,

Two lookers, のぞき屋が2人,

Two crookers, ペテン師が2人,

And a wig-wag. ルンペンが1人では。

(雌牛: 'cow'[ペテン師は耳, ルンペンは尾])

「4-2-3」

It walks on four legs, then on two, then on three legs.

初め4本足で歩き, つぎに2本足で歩き, そのあと3本足で歩くもの。

(人間: 'man')

これら3種類の数詞の6例の中5例に「1」が含まれている。また日本語と同じく、3種類の数は反義的でなく、連続性を表現していると考えて良いだろう。そのためであらうか、6例すべて、1から5までの近い数から3種類選ばれていることに注目すべきである。

5.4 繰り返し

以上45例を紹介したが、同じ数詞が繰り返されている例について少し言及したい。2度だけの繰り返しが4例あった。それらをまとめると以下ようになる。

- (41) ・ What is that with one leg and one eye?
・ Four legs up and four legs down,
Soft in the middle and hard all 'round.
・ A large theatre has two large windows upstairs,
two windows downstairs,
a large door with white people, a red stage. What is that?
・ Four stiff-standers,
Four dilly-danders,
Two lookers,
Two crookers,
And a wig-wag.

以上の4例の上の例から順に、1, 4が繰り返されて、3番目と最後の例では2と1, 4と2の両数が繰り返されている。日本語は「1」だけであるが、英語では、「2」と「4」も繰り返されている。しかし、一桁の数だけが繰り返されているという点は、日英間で共通している特徴である。

5.5 英語のなぞなぞに於ける「数」の役割

5.1-5.4で観察した結果では、英語のなぞ34の内15のなぞに数詞「1」があり、一番多いが、次に多い「4」も12例、「2」も10例あり、「1」だけが特別に多いという訳ではない。四桁の「1000」は、3例あるが、他の数詞の頻度は2例以下と低い。しかしサンプルデータ34のなぞで約4割に「1」が含まれていること、同時に、35%に「4」が用いられていることは注目すべきである。一桁の数では、「1」の他に「2」「3」「4」

がある程度の頻度で使用されている。また、二桁では「10」、「30」、「39」、「80」の4種類、三桁では「100」、四桁では「1000」だけである。つまり、一桁と二桁は、数詞の種類が多いが、三、四桁は1種類だけであった。

1種類の数詞が用いられているなどでは、19例の内「1」が5例、「4」が4例で、「2」と「1000」が各2例に用いられている。数詞の対立として反義性が認められる2種類の数詞が見つけれられるなどでは、9例中6例に「1」が観察され、「1」-「2」と、「1」-「4」の組み合わせが2例ずつあった。最も数が離れている組み合わせは、「2」-「1000」で、その次は、「1」-「100」と「1」-「30」であった。3種類の数詞と一緒に見られるなどは、5例あったが、数詞が1~5に限られ「1」と「4」が5例に見つけられた。全体の印象は、「1」と「4」が多いことであると言えよう。

6. 日英間のなぞでの数詞の比較：類似点と相違点

4節と5節で日英のなぞの数詞について検討した。この節では、その結果を比較して、類似点と相違点を考察する。研究対象とした日本語の二段なぞの総数が158で、その中45例(28.5%)に数詞が含まれていた。一つのなぞでの同じ数詞の繰り返しは、1例とカウントした。複数の数詞が一つのなぞに含まれるので、数詞の総数は63個であった。英語のなぞは、総数131の内34(26.0%)のなぞに数詞があり、総数53個の数詞が見つかった。従って、サンプルデータは、日本語の数詞の総数が英語のデータより2割多いが、数詞が含まれる割合はほぼ同じであった。

まず類似点から考えることにする。日英どちらの数詞にかんしても言えることは、「1」が最も多く観察されたことである。また、それに続く「2」が二番目に多い点も共通している。さらに、一桁の「5」以降は、両言語のデータに1例か2例しかない。つまり、両言語とも、「1」から「4」までの数詞が頻度の上位4位までに入っている。次の類似点は、日英のデータともに、一桁の数詞は、種類が多いが、三、四桁は1種類だけしか見つからなかったことである。日本のデータは一桁の数は、「7」、「9」以外の7種類が使用されている。しかし、三桁は「100」、四桁は、「1000」でそれぞれ1種類だけである。同様に、英語のデータでも、「7」、「8」、「9」以外の6種類だが、三桁では「100」、四桁では、「1000」だけである。3番目の類似点は、三桁の数詞と四桁の数詞が、頻度にかんして少々異なるが、「100」と「1000」であったことで、さらに五桁の数詞は両語のデータに見つからなかったことである。4番目の類似点は、2種類の数詞が反義的に用いられているなどなどでは、両言語のデータで、7割前後に「1」が対比の軸として用いられていた点である。具体的には、

日本語のデータは13例中10例で、英語では、9例中6例は「1」と他の数詞との組み合わせであった。5番目の共通点は、2種類の数詞が用いられているなどで、最も数が離れている2つの組み合わせについて見られた。それは、日本語データで「2」-「12」と「1」-「100」、英語は、「2」-「1000」があったが、それ以外は「1」-「30」と「1」-「100」といった日本の例と似た組み合わせであった。両言語データともに、「1」-「1000」の組み合わせがなかった。「1000」は、両言語で、反義的な用法より、単独で用いられる傾向があると言えよう。最後の類似点として挙げられるのは、3種類の数詞が一つのなぞに現れる場合に、両言語のデータともに、「1」から「5」までの数に限られていたことである。

次に相違点を挙げることにする。まず、上位の頻度で使われている数詞の順位が同じではない。日本のデータでは、「1」→「2」→「3」→「4」の順で頻度が下がるが、英語では、「1」→「4」→「2」→「3」の順になっている。また、両語の上位1位と2位の割合も違っている。日本データでは、1位(51%)と2位(24%)の差は、26%もあるが、英語のデータでは、1位(44%)と2位(35%)の差は9%しかなかった。この違いから、日本のデータでの頻度1位の数詞「1」は、英語の「1」とは同質でないことが暗示されていると理解できる。また、数詞の種類にかんして、日本のデータでは、二桁が「12」だけであるが、英語のデータでは、二桁は「10」、「30」、「39」、「80」の4種類もあった点が異なっている。また3種類の数詞が用いられているなぞが日本語のデータでは、3例だが、英語のデータではその倍の6例もあったことである。データ数自体英語の方が少ないので、正しい比較はできないかもしれない。しかし2種類の数詞の組み合わせの総数は、日本語13例で、英語が9例である一方で、3種類では英語の方が多いというのは、注目されるべき特徴である。また、一つのなぞに同一の数詞が繰り返されている例が、日本のデータでは、「1」の2例だけであるが、英語では4例もあった。

7. ことわざに用いられる数詞

奥津(2000: 201-223)は、数の意味と役割について日本と英語のことわざを比較している。ことわざでの数を用いることは誇張表現として、具体性を帯びさせ、訴える力を増す効果があると述べている。結論として、文化的背景から、英語では2で割り切れない奇数の3, 7, 9が霊験不可思議な数とみなされ、それらを用いられる頻度が高い。しかし、3, 7, 9を除く数については、日本のことわざの方が、数を使用する度合いが高いと述べている。また、100や1000は、英語ではあまり頻繁には

用いられないが、日本のことわざで驚く程使われていると言う。例えば、百両、千両、千年、百歳、百戦、百日、千日、千里などが見られる。これは日本人が具体的表現を好む気質を表していると奥津は指摘している。

7.1 日本語のことわざにみられる数詞

日本語のことわざに於ける数詞の役割を検討する。『小学生のためのまんがことわざ辞典』を参考に、基本的なことわざ（慣用句等も含む）として扱われている中で、どの数がより頻繁に用いられているか見ることにしよう。¹⁵⁾ 基本的であると取り上げられている表現の数は272である。その中で、30の表現に、数が含まれることが分かった。従って、数が含まれることわざ（慣用句等も含む）の割合は全体数の約1割（11.03%）に相当し、量的に多いわけではない。以下に、見つけられた数詞を例数と共に示した。なぞなぞと同様に、1種類の数詞が1つのことわざで繰り返されている時は、1例としてカウントしている。

表3 30の日本のことわざにみられる数詞と使用例数

数詞	‘1’	‘2’	‘3’	‘5’	‘7’	‘8’	‘9’	‘10’	‘50’	100’	‘1000’
例数(41)	18	4	6	2	1	3	1	1	1	3	1

上の結果から、「1」の頻度が極めて多いこと（18例）が分かる。また、二番目に多い数は「3」（6例）で、その次に多いのは、「8」と「100」で3例ずつである。一桁では二つの数（「4」と「6」）が見つからなかった。また、同じ数が繰り返されているものが5例あった。注目すべき点は、1つの表現に2種類の数が含まれることわざが8例見つかったが、3種類以上の数が含まれる例は見つからなかったことである。以下1種類の数詞だけ含まれる例と、2種類の数詞が含まれる例を紹介した後、最後に繰り返されている例を挙げる。

(42) 1種類の数詞だけを含まれることわざ (21例)

・「1」（12例）

「一事が万事」 「一難去ってまた一難」 「一目置く」 「一朝一夕」
 「一危機一髪」 「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」 「一紅一点」
 「つるの一声」 「一筋縄ではいかない」 「一肌ぬぐ」 「一氷山の一角」

「ローマは二日にして成らず」

・「2」(2例)

「二階から目薬」 「二足のわらじをはく」

・「3」(4例)

「朝起きは三文の徳」 「石の上にも三年」 「三度目の正直」

「三人寄れば文殊の知恵」

・「5」(1例)

「五里霧中」

・「8」(1例)

「当たるも八卦当たらぬも八卦」

・「10」(1例)

「十人十色」

(43) 2種類の数詞が含まれることわざ (10例)

・「1」 - 「2」 「一姫二太郎」

・「1」 - 「5」 「一寸の虫にも五分の魂」

・「1」 - 「8」 「一か八か」

・「2」 - 「3」 「二度あることは三度ある」

・「3」 - 「100」 「三つ子の魂百まで」

・「7」 - 「8」 「七転び八起き」

・「9」 - 「1」 「九死に一生を得る」

・「50」 - 「100」 「五十歩百歩」

・「100」 - 「1」 「百聞は一見に如かず」

・「1000」 - 「1」 「千載一遇」

(44) 数詞の繰り返し (5例)

・「1」 「一難去ってまた二難」 「一朝二夕」 「聞くは二時の恥, 聞かぬは二生の恥」

・「8」 「当たるも八卦当たらぬも八卦」

・「10」 「十人十色」

上の例で、数詞には、一般性の高い助数詞（「個」「つ」）や、比較的早く習得する「人」「匹」があまり用いられていないことが分かる。このことは、ことわざが、

幼い子供たちが楽しむなぞなぞとは異なる性質のものであることを示している
と理解できる。

7.2 英語のことわざにみられる数詞

次に、英語の基本的なことわざを調査し、数詞の性質を検討する。データは、奥津(2000:225-256)による現代英米人の常識として最もよく知られている220のことわざにした。¹⁶⁾ なぞなぞでの基準と同様に、他の数詞と対比されていたり、明確に単数を表現していると認められる場合は、‘a(n)’が「1」を表現するとして‘one’
と同等であるとした。例えば、‘Rome was not built in a day’(「ローマは一日にして成らず」)の‘a’は、「1(日)」を表すので、他の数詞と対比されていないが、‘one’
に相当すると考えた。また、序数だけでなく、なぞなぞには使われていなかった、
‘once’(‘one’の属格から派生した)と‘twice’(‘two times’と同じ意味)は、それぞれ「1」「2」とみなした。数詞が用いられることわざの総数は、220のことわざの内23で、全体の10.5%に相当し、日本語のことわざと同様に約1割で量的には多くない。1種類の数詞が1つのなぞで反復されても、1例とした。数詞が含まれることわざだけを集めて、分析すると以下のような結果になった。

表4 23の英語のことわざにみられる数詞と使用例数

数詞	‘1’	‘2’	‘3’	‘9’
例数(30)	17	9	1	3

上の結果から、容易に気づくことは、数詞の種類が4種類しかないことである。一桁の4種の数だけで、二桁以上の数が見つからなかった。サンプル数が少ないので、正確とは言えないが、このように数が限られているというのは、英語のことわざの特徴であるかもしれない。また、数詞の中では、「1」の頻度が極めて多いこと(17例)、また、二番目に多い数は「2」(9例)で、その次に多いのは、「9」の3例である。「1」の繰り返しが5例観察された。日本語のことわざと同様に、1つの表現に2種類の数が含まれることわざは7例あるが、3種類以上の数が含まれる例は見つからなかった。以下1種類の数詞だけ含まれる例と2種類の数詞が含まれる例を紹介した後、最後に繰り返されている例を集める。

(45) 1種類の数詞だけを含むことわざ (16例)

「1」(11例)

- A miss is as good as a mile.
「わずかの失敗も大きな失敗も失敗は失敗だ (五十歩百歩)。」
- An apple a day keeps the doctor away. ¹⁷⁾
「1日1個のりんごは医者^をを遠ざける。」
- First come, first served.
「最初に来た者が最初に食べ物を供せられる (早い者勝ち)。」
- Give him an inch and he'll take a yard. 「1インチを与えると1ヤードを取ろうとする。(負うてやろと言え^ば抱いてくれ^と言う)。」
- One good turn deserves another.
「1つの善行は他の善行に値する (情けは人の為ならず)。」
- One man's meat is another man's poison.
「ある人には食べ物であるものも他の人は毒である (蓼^た食う虫も好き好き)。」
- The first step is always the hardest. 「最初の一步はいつも一番難しい。」
- Don't put all your eggs in one basket. 「卵をすべて1つのかごに入れるな。」
- One swallow does not make a summer. 「ツバメ一羽では夏にはならない。」
- Rome was not built in a day. 「ローマは一日にして成らず。」
- There's more than one way to skin a cat.
「ネコの皮をはぐ方法は1つではない。」

「2」(3例)

- Between two stools you fall to the ground.
「2つの腰掛けの間で尻もちをつく (アブ蜂取らず)。」
- It takes two to tango. 「タンゴを踊るには2人いる (片手で錐はもめぬ)。」
- Lightning never strikes the same place twice.
「雷は二度同じ場所には落ちない。」

「9」(2例)

- Possession is nine points of the law.
「所有は法律の九分 (預かり主は九分の主)。」
- A cat has nine lives. 「ネコに九^{きゅうじゅう}生あり。」

(46) 2種類の数詞を含むことわざ (7例)

「1」 - 「2」 (2例)

- A bird in the hand is worth two in the bush.

「手の中の1羽の鳥は藪の中の2羽の価値がある (明日の百より今日の五十)。』

- Once bitten, twice shy.

「一度嘔まれると二度目は用心する (^{あつもの} 糞 に懲りて ^{なます} 膾 を吹く)。』

「1」 - 「9」 (1例)

A stitch in time saves nine. 「手遅れにならないうち1針縫っておけば、あとで9針縫う手間が省ける (今日の手遅れは明日へついて回る)。』

「2」 - 「1」 (3例)

- Kill two birds with one stone. 「1つの石で2羽の鳥を殺す (一挙兩得)。』

- Two heads are better than one.

「2つの頭は1つの頭にまさる (三人寄れば文殊の知恵)。』

- Two blacks do not make a white. 「黒に黒をたしても白にはならない。』

「2」 - 「3」 (1例)

Two is company, but three is none [a crowd].

「2人ならば良い連れ, 3人なら仲間割れ。』

(47) 数詞の繰り返し 「1」 (4例)

- A miss is as good as a mile. • An apple a day keeps the doctor away.
- First come, first served. • Give him an inch and he'll take a yard.

上の例からも分かるように、「1」の繰り返しの例は、「a(n)」と序数の「first」だけで、「one」は含まれていない。

7.3 日英間でのことわざに於ける数詞の比較

以上、日英のことわざの数詞を分析したが、その結果を比較してみよう。共通点として、まず、両言語のサンプルデータ全体の約一割に数詞がみられたことが挙げられる。また、両言語データで「1」が最も多く用いられていた。日本語のデータは、30例の内18、英語は、23例の内17であったので、英語のデータの方が割合として多くなるが、これは、「one」だけでなく、「one」の用法に近い「a(n)」も「1」を表すとみなしたからであろう。さらに、一つのことわざに2種類までの数詞は見ら

れるが、3種類以上の数詞が使われている例は両データに見つからなかった。次に相違点であるが、数詞の種類が日本語データは、11種類であったのに対し、英語データでは一桁の4種の数（「1」「2」「3」「9」）だけしか現れなかった。また、奥津（2000）が述べているように、日本語データにある「100」と「1000」は、英語データには見つからなかった。

8. 結論

本稿では、日本語と英語の比較から、民間に伝わるなぞなぞや、ことわざの中で、数がどのような働きをしているかについて検討した。最も顕著に見られた特徴は、両言語で「1」が数詞の中で最も頻度が高く、単独で現れるだけでなく、2種類以上の数詞が対比して用いられる時にもしばしば軸として登場することが観察された。これは、両言語にとって、「1」の意味が、単に数量を表すだけでないという仮説を裏付ける結果である。また、英語のなぞなぞは、「4」が「1」程ではないが、頻度が高いことから、何らかの属性形容詞としての意味があることが推測される。また、日英間で、なぞなぞに見られる数詞の傾向がある程度似ていることも観察されたが、ことわざは、日英間でかなり異なっていた。特に英語のデータから、数詞の種類は、なぞなぞでは12種類も見つかったが、ことわざでは4種類しか見つからなかった。

本稿では、「1」と‘a’の関係性を考え、英語での単数の扱い方の基準を整えた。以前に比べデータ数を増やし、より正確な考察から、「数」は単なる数量詞として捉えるべきではなく、質的な意味を表現する可能性の裏付け調査をした。今後の課題としては、各数詞の属性形容詞としての働きを探り、具体的な意味を提示する必要がある。

注

- 1) 「数」とは、以下に示される松本(1996)の分類では、数字と数詞に分けられるが、本稿は主に数詞について考察する。
- 2) 明治安田生命の『生まれ年別ベスト10』と『名前ベスト100』の男の子と女の子のサイトを以下に示す。

(http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/year_men/boy.html)

(http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/year_men/girl.html)

(<http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/best100/boy.html>)

(<http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/best100girl.html>)

- 3) ケルト語圏を除くイギリスとアメリカ合衆国のなぞなぞを扱っている。
- 4) 二段なぞの最後の部分の「…なあに」や「…なんだ」は省略した。また、なぞの答は括弧内に示した。
- 5) 「によう」は稲積みのこと。
- 6) 福島のなぞで、「とんぼ」は入口の意味である。
- 7) 津軽弁で「ふっばる」は、ひっばること。
- 8) 「しまん」(四幡)は、「八幡」の「八」を4足す4が8という足し算をもとに答が導かれるよう造語されたと思われる。
- 9) 「ひとり」は『世界なぞなぞ大辞典』(1984:14)によると「六角堂に小僧独り…」であり、『新版ことば遊び事典』(1981:136)では、「六角堂に小僧一人…」とある。本稿では数詞に関連する後者の漢字を取り入れた。
- 10) 序数詞でも、‘at first’のような成句は含めなかった。
- 11) このなぞなぞは、‘four legs’「4本足」と‘forelegs’「前足」が同じ発音であることから、前足を4本として後足2本を足し合計6本が答えになる。
- 12) 英語は、親指が‘thumb’で、それ以外の指は‘finger’と別の単語で表現する。日本語では、これらを区別しないので、‘four fingers and a thumb’の訳は「5本」となるのである。
- 13) 『世界なぞなぞ大辞典』では、^{ばてい}「馬蹄工：‘shoemsmith’」とあるが、誤訳であると判断し、‘horseshoer’に修正した。
- 14) このなぞでは、「1-3-4」と数の連続が表わされているとみなし、‘a’が「1」に相当すると考えた。
- 15) 『小学生のまんがことわざ辞典』(2004)で扱われている表現には、ことわざの他に、似た表現として慣用句(ある決まったことばで、決まった意味を表すことば〔例：小耳にはさむ〕)、故事成語(中国の古い話からできたことば〔例：鯉の滝登り〕)、四字熟語(漢字四字で表すことば〔例：以心伝心〕)が含まれている。
- 16) ことわざは、英米の6点の参考書と辞典を基に選ばれている。
- 17) このことわざの‘a day’は「1日につき」という意味で、(7)の(v)に相当するためカウントすべきではないが、‘an apple’との関係性から「1-1」の反復が認められると考え下線を施した。

参考文献

- 天岩静子 1997. 「自由遊びの中で幼児が用いる数表現」 『信州大学教育学部紀要』 92: 77-85.
- 天岩静子 1999. 「数の発達心理学」 『言語』 28 (10) : 60-65.
- 今井むつみ・針生悦子 2007. 『レキシコンの構築』 岩波書店, 東京.
- 奥津文夫 2000. 『日英ことわざの比較文化』 大修館書店, 東京.
- 清海節子 2013. 「日本と英語のなぞなぞ比較 (3)」 『駿河台大学論叢』 47: 109-141.
- 清海節子 2014. 「個人名となぞなぞに探る日本語に於ける『1』の属性と用法」 『比較文化研究』 (日本比較文化学会) 113: 25-34.
- 清水康行 1999. 「日本語の数表現」 『言語』 28 (10) : 42-47.
- 寿岳章子 1979 (1990 新装版). 『日本人の名前』 大修館書店, 東京.
- 鈴木棠 2009. 『ことば遊び』 講談社 [講談社学術文庫], 東京.
- 難波三郎 1985. 「芭蕉の俳句英訳試論 (1)」 『岡山理科大紀要 B, 人文・社会科学』 20:95-101.
- 松本克己 2006. 『世界言語への視座』 三省堂, 東京.
- Quirk, Randolph et al. 1985 (1997¹⁴). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Wilson, Dave. 2004. *Rock Formations: Categorical Answers to How Band Names were Formed*. Tregaron: Cidermill Books.

辞典

- 『小学生のまんがことわざ辞典』 金田一春彦 (監修) 2004 (2010¹⁵). 学研教育出版.
- 『新版ことば遊び事典』 鈴木棠三 (編) 1981. 東京堂出版.
- 『世界なぞなぞ大辞典』 柴田武, 谷川俊太郎, 矢川澄子 (編) 1984. 大修館.
- 『ジーニアス英和大辞典』 (電子版) 小西友七・南出康世 (編) 2001-2008. 大修館書店.
- Oxford Dictionary of English*. Third edition. 2010. Oxford:Oxford University Press.